



県中いわて

平成30年10月1日 / 第244号

●発行／岩手県中学校長会 ●代表／佐藤 進（盛岡市立上田中学校） ●事務局／〒020-0885 盛岡市紺屋町2-9
（盛岡市勤労福祉会館2F）／電話019(622)0572 ●印刷／杜陵高速印刷／電話019(651)2110

中体連・中文連だより

岩手県中体連の活動

岩手県中学校体育連盟
会長 大林 裕明（下小路中）



今年度の県中総体は、関係するたくさんの方々のお力添えをいただき、県内9市3町を会場として17競技に7,886人の選手の出場で開催されました。

中央開会式は、盛岡市立太田テニスコートで、各地区中体連を代表するソフトテニス競技選手団・役員等合わせて800人の参加により行われ、岩手県教育委員会高橋嘉行教育長様から激励の言葉をいただきました。

また、各競技会場では、選手たちが多くの保護者や仲間の声援を受け、日ごろの厳しい練習によって培われた技術や精神力により白熱したプレーが展開されました。

県大会に続き東北大会が各県で開催され、本県では盛岡市でソフトテニス競技、北上市で陸上競技を開催しました。二つの会場とも競技団体や地元中体連の皆様から献身的な準備と運営をしていただき、滝沢中学校陸上部女子400mリレーチームと北上中学校女子ソフトテニス部松橋・及川ペアがそれぞれ優勝するなど成功裡に終了することができました。

さらに、中国ブロックで開催された全国大会に出場した本県の選手は、大宮中学校の吉田求さんが体操男子種目別鉄棒で第2位、花泉中学校女子ソフトボール部と沼宮内中学校女子ホッケー部が第3位、柔道女子個人戦で北上中学校千葉むつみさんが第3位を含め、8競技で計11の8位以上の入賞という素晴らしい成績を収めました。

さて今年6月、県教委より「岩手県における部活動の在り方に関する方針」の通知があり、現在各市町村において同様の方針を策定中と伺っております。

県中体連として、県中学校長会や各地区中体連と連携をしながら、望ましい部活動の在り方についての情報共有や検討を進めるとともに、引き続き、たくましく人間性豊かな中学生の育成に取り組んでまいります。

心をひとつに！

岩手県中学校文化連盟
会長 小野寺昭彦（下橋中）



8月24日（金）、25日（土）、第18回全国中学校総合文化祭長崎大会がアルカスSASEBOを会場として開催されました。

舞台発表の部には、昨年度県総合文化祭において推薦校となった二戸市立金田一中学校の2・3年生が本県代表として出演し、演劇「藍の風が吹くとき〜いのちの理由〜」を発表しました。大人になれなかった座敷わらしたちが、命の尊さについて中学生に訴えるストーリーと生きることの大切さを届けた最後の場面での全員の合唱は、場内を感動の渦に巻き込み、惜しみない拍手が送られました。



また、展示部門には、書写条幅5点、絵画9点、切り絵2点の力作が展覧され、数多くの方に鑑賞いただきました。各地区のご協力に心から感謝を申し上げます。

さて、11月22日（木）には、第17回岩手県中学校総合文化祭が、岩手県民会館を会場として開催されます。今年度はメインテーマを「響く」とし、まさに、県内各地区からの中学生の発表が響き合う、そして心が響き合う場にしていきたいと考えております。どうぞ、よろしくお願いします。

また、各地区では9月から11月にかけて地区総合文化祭や各種発表会等として、特色ある活動を展開していただいておりますことに感謝申し上げます。

3年後の2021年度には、これまで復興のために御支援をいただいた全国の皆さんへの感謝と復興に向け力強く前進する岩手の姿を見てもらうべく二度目の全国大会岩手大会が予定されています。これからの大きな目標として、岩手の全ての中学校が心をひとつにして取り組んでいきたいと考えております。

結びに岩手県中学校文化連盟の更なる充実と発展を目指し、皆様の御理解と御協力をいただきながら力を尽くしてまいりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

私の学校経営

「できた わかった
学校が楽しい」

盛岡地区 早坂 将（北陵中）



昨今の社会状況のご多分に漏れず、本校の生徒たちも人間関係や家庭の状況など様々な問題を抱えながら生活しています。その中で行事や部活動を頑張り活気をもたらしえてきたのが北陵中の伝統ですが、歴史がある分、一つひとつの取り組みが形骸化し、こなすことに終始している感がありました。

そこで、学校運営全体に共通して流れる意識を創るため、学校教育目標を「合言葉」のようなもので分かりやすく表せばいいのではないかと思いつきました。そこで話し合っただけで決めたのが学校公開の副題でもあった「できた わかった 学校が楽しい」です。さらに「～ワクワクしながら登校し、次の日の目標を胸に下校する学校～」と続きます。

授業・生徒指導・行事・部活動など、すべての取り組みの原点として、最初に意識する言葉と位置づけています。それにより、◎張り切って頑張る生徒が増え学校全体に明るい雰囲気。◎結果も大切だが、取り組みの過程に目を向ける生徒が増えることを。◎それが徐々に保護者にも伝わるように。◎職員会議や校内研で同じベクトルで考えることができ、効率的で達成感のある取り組みが増えるように。◎校長として、生徒や先生方を評価し認める際、明確な基準となるように。などを目指しています。

また、合言葉に続く学校経営の重点では、「知」「徳」「体」の三本柱に加え「特別支援的な視点（ユニバーサルデザイン）」を位置づけています。三本柱全体を包み込むようなイメージです。先生方に新たな視点の指導観をもってもらい、課題解決に近づいてもらいたいと考えました。また、教師主導の指導に偏ることの防止、何よりも生徒の安心感を醸し出したいと考えます。

これらのことを通じ、学校の明るい雰囲気を醸成し、信頼感を丁寧に積み上げたいと思います。そしてその結果として、本校の課題である、学力向上や不登校の改善を、さらに部活動や行事の今以上の盛り上がりを実現していきたいと思っています。

私の学校経営

『ハンドボール指導
の経験から』

釜石地区 菊地 正道（唐丹中）



私が学校を経営するにあたり心がけていることは、次のことです。

- ①課題意識を持つ。
- ②自分自身が最終ゴールをしっかりイメージし、それを職員に示す。
- ③多面的に情報を把握し、担当者の意見を聞く。
- ④対応策は具体的に確認する。
- ⑤その後の状況を確実に報告させ、その後の対応については、前記のものを繰り返す。

「何を今さら！」という声が聞こえそうですが、いわゆる『PDCA』サイクルです。

これは、実は自分がハンドボールを指導する過程で心がけていたことです。私が出会った全国の素晴らしい指導者の皆さんは、どの方もこの過程がしっかりしていました。また、この考え方が教員としての全てに通じているので、どの方も押し並べて素晴らしい教師でもありました。

私自身は、当然まだまだ未熟で不十分なわけですが、今、ハンドボールの指導者から、学校経営の立場になり、学校を少しでも向上させるために、常にこうあり続けたいと思っています。

もう一つ、私の学校経営に欠かせないものに、諸先輩方からいただいた的確なアドバイスがあります。豊かな人間性と深い経験に裏打ちされた貴重な考えやご意見は、私の成長には欠かせないものでした。今の自分があるのも、その皆様のおかげであると言っても決して過言ではありません。

今はまだ経験が浅く、自分の学校の経営も十分ではありませんが、さらに人間性を成長させ、校長としての経験を充実させることで、いつか自分も後輩たちの役に立てる存在になりたいと思います。

新任校長の抱負

「地域の宝を地域の担い手に」

岩手地区 熊谷 治久（西根第一中）



4月、白い雪を冠した美しく雄大な岩手山が窓一面に広がる本校に着任。そびえ立つ岩手山を眺めながら、生徒をこの岩手山のように、さらにたくましく健やかに育む学校経営を目指すことを決意したのです。

本校が重視しているのは、生徒の主体性。様々な活動の中で、生徒が自ら考え判断し、自ら行動する機会を数多く設定しています。運動会に向けて3年生は、修学旅行中の新幹線の中で運動会週間の打合せ。当日までの期間に、どんな練習や活動をする必要があるかをリストアップし、それを要領よく計画しました。前日準備は、まさに生徒主体の運営。先生方に細かく指示されることなく係活動を進め、当日の運営まで行いました。この力は地区民運動会でも発揮され、放送係の3年生はマイクを前にてきばきと進行し、用具係の生徒は競技に使う用具を抱えて校庭を縦横無尽に駆け回り、大人顔負けの行動力で円滑な進行に貢献。生徒たちは様々な場面で当事者意識を強く持ち、今自分は何をすべきかを考え、実行する力を着実に高めてきていることを実感しました。

また本校では、生徒を地域を担う人材に育てるため、地域との関わりを大切にしています。敬老会では、合唱とソーランの披露。生徒たちの発表に拌むように拍手をしていただいたお年寄りの様子とともに、生徒のキレと迫力のある踊りに触発されたのか、可愛いお遊戯を披露した保育園児たちが生徒のソーランの真似をして楽しそうに踊る様子を見ながら、地域の宝である本校生徒をさらに磨き、地域の担い手や地域を牽引するリーダーとして大切に育てていかなければならないことを再確認しました。

自らの郷土の未来を支え、汗を流して行動する生徒を育成するため、教職員とともに今日もまた、生徒たちとしっかり向き合っていきたいと思っています。

新任校長の抱負

『一人一人が輝く学校をめざして』

胆江地区 松井 繁紀（江刺東中）



本校は、奥羽山脈と北上高地を見渡すことのできる江刺の東陵の丘に位置する。空気の澄んだ日には岩手山の山頂も見ることができ、夕日が沈む時刻には天空の城をイメージする素晴らしい風景が広がる。

4月には、学区の歓迎会が5会場で行われ、地域の学校に対する熱い想いと責任の重大さを痛感した。

めざしたいのは「生徒一人一人が輝く学校」にすることだ。生徒は学区の5つの小学校から入学し、初めて30人ほどの学級で集団生活を始める。その中で集団の人間関係と同じ目標に向かって努力し団結することの素晴らしさを学ばせながら、学習や部活動、各種行事等で個性を輝かせたい。

5つの中学校が統合した創立当時に500名近くいた生徒数は、現在全校で89名である。小規模ではあるがとても活気があり、生徒一人一人が明るく素直である。伝統として定着しつつある応援は圧巻で、生徒一人一人が主役となって大声を出し、自信をもってきびきびと動くエネルギーに仕上がってきた。授業にも真面目に取り組み、部活動でも男子バレーボール部が県中総体で3位に入賞するなど大規模校に負けない活躍を見せている。

生徒一人一人が輝き、社会で自立する力を育成するために、どんな学びの地図を描けばよいのかを思い悩みながら、あっという間に1学期が終わってしまった。まだまだ未熟な学校経営ではあるが、胆江地区の先輩校長先生方に支えられながら、また、職員の力を借りて何とかスタートした学期だった。

校歌の一節『われらこぞりて道を拓かん』の歌碑が校門から校舎へ続く坂道に飾られている。毎朝、この歌碑を見ながら、「チーム東中」として職員のもつ力を同じ方向に向かわせ、生徒一人一人が輝く学校を実現するためにどうすればよいかを考えている。

微力ながら、地域の課題をしっかりととらえ、小規模のよさを活かしながら生徒一人一人が輝く学校をめざし、力を尽くしていきたい。

各地区校長会活動

NOW

和賀地区校長会



人材育成と組織力を高める
学校経営の充実を目指して

柿崎 肇 (江釣子中)

1 はじめに

和賀地区校長会中学校部会は、北上市9校、西和賀町2校の合計11校で構成されている。平成27年度より「教職員の専門性を高め、組織力を高める学校経営の在り方」をテーマとして調査・実践研究を進めている。

2 活動方針

- (1) 人材育成を意識した学校経営に資する研修の充実に努める。
- (2) 校長としての識見・力量を高め、教育課題の解決に努める。
- (3) 会員相互の親睦・交流を図り、連帯意識を高める。

3 本年度の主な活動内容

(1) 小中の連携 (全体研修)

合同の研修を年3回行っている。1回目は中部教育事務所長、教務課長の両名から講話及び教育課題についてお話を頂いた。小・中の課題や研修内容の交流を図っている。

(2) テーマに沿った研修の充実(中学校部会)

研修会場校の授業見学と校長の経営説明、部員相互の課題とその解決のための意見交流等を行っている。これらの活動や実践の交流を通して、校長の力量を高め、各校の人材育成によるチーム力の向上をめざしている。

(3) 地区内5校の高等学校との連携

地区中・高の校長連絡会を年2回行い、情報交換や教育課程の調整を図っている。高等学校(専大北上)の先生の講演は適切な進路指導の機会になった。懇親会も行っている。

4 おわりに

「教育は人なり」と言われている中、教員の要である中間層が少ないことに危機を感じている。その解決のため、本校長会が、相互に学び合い、連携し、交流を図り、深めあえる場になるよう努力したい。

宮古地区校長会



会員相互のつながりを
大切にして

伊茂野 達 哉 (宮古西中)

1 はじめに

宮古地区校長会中学校部会は、宮古市11校、山田町2校、岩泉町5校、田野畑村1校の合計19校で構成され、諸課題への取組や研修活動の充実を図り、情報交換や親睦交流を深めながら地域課題に対応できる組織づくりを推進している。

2 本年度の活動方針

- (1) 校長としての識見、力量を高め、学校経営の充実・改善に資する研修を推進する。
- (2) 創意に満ちた特色ある学校経営の充実を図るとともに、今日的な課題への対応と学校教育の充実・改善に向けた研究推進に努める。
- (3) 関係諸機関、諸団体との連携を密にし、教育環境や教育諸条件の整備充実に努める。
- (4) 研究大会等へ積極的に参加し、成果を学ぶ合う。

- (5) 各市町村校長会との連携を密にし、問題解決と会員相互の親睦を図るとともに、実践交流や情報交換を積極的に行う。

3 主な活動内容

今年度、地区中学校部会では、ネット・スマホ等の使用について焦点化し、校長としての関わりについて実践研究を進めることとした。7月には宮古地区内生徒会代表による「ネット・スマホ等の使用に関する意見交換会」を実施し、その後、「スマホ・メディアの安全使用宣言(案)」が宮古地区中学校連合生徒会名で各校に示され、各校ではこれを議論し、具体的実践に取り組むこととしている。

4 おわりに

地区校長会では、個々の学校を取り巻く物的・人的環境を踏まえつつ、確かな経営理念のもと特色ある学校経営を推進していくために4市町村会員相互の横のつながりを大切に行っている。今年度は、県小・中学校長研究大会宮古大会開催にあたり、「堅固な連帯意識をもって情熱と誠の人づくりを発信する校長会」を合言葉に全会員が一つにまとまり進めている。

「平成29年度における生徒指導の諸問題に係る調査」の概要

会員の皆様のご協力と生徒指導部地区担当者の皆様、そして、幹事の方々のご尽力により、今年度も本調査の『結果と分析』をまとめることができました。心から感謝申し上げます。

9月3日には第2回地区担当者会議、小・中学校長会生徒指導情報交換会を開催し、概要を報告しました。

以下、調査結果の概要を紹介いたします。

1 各学校の生徒指導の状況

「問題行動はなかった」と回答した学校が57%（90校）で、平成23年度以降最も低い数値となった。

6割程度の学校は概ね落ち着いた状況であるが、「問題行動の心配がある（3件未満）」の回答数が多く、各校では危機意識をもって対応していく必要がある。

2 対教師・対生徒への問題行動

対教師の「生徒数」は前年度比51人増、件数では、323件増となり、指導の困難さがうかがわれる結果となった。対生徒の「生徒数」の合計も前年度比268人増、件数でも295件増であった。

一部の学校の特定の生徒による問題行動が発生件数を増加させたものと推察される。

3 怠学等の問題行動

「怠学」「校則違反」「一般的非行」において、前年度比85人減少した。また、すべての項目の合計と「怠学」「校則違反」の合計が平成23年度以降最も低い数値となった。ただし、全体としては減少傾向にあるものの、男子生徒の問題行動が増加しており、今後も注意を払う必要がある。

4 いじめ問題の状況

平成29年度の認知数は1379人で、平成27年度の657人、28年度の841人から大幅に増加した。「いじめは、どの学校にもどの子にも起こりえること」という認識のもと“素早く的確に認知し、組織で対応すること”の重要性がさらに浸透してきたものと捉えられる。

いじめの解決率は、全学年平均で前年度86%から90%となった。「解決したかどうかは3か月程度の

観察が必要」との基準は、毎年職員間で確認していきたい。

いじめの態様では、「ひやかしからかい」が最も多く、「暴力をふるう」「仲間外しや無視」がそれに続く。平成27年度調査から始めた「ネットいじめ（SNS等による誹謗中傷・悪口など）」は、学校や保護者には認知しにくいことから今後も注意を払っていきたい。

今年度調査から「いじめ・暴力行為等に効果的だった活動」が報告されている。本県では「生徒へのアンケートや連絡ノートでの把握」が最も多かった。全国との比較では、「学年・学級での人権学習」「教委・警察・児相との連携」の取組が本県に比べて高い割合であった。

5 不登校の状況

年間30日以上欠席の生徒の出現率は前年度と同じく過去5年間で最大（2.67%）となり、回復率も前年度の18%とほぼ同様であった。また「100日未満」では5人に1人、「200日以上」では2人に1人が小学校からの継続であった。中1ギャップのみならず中2に進級する際も急増しているため、きめ細かな指導が必須である。

6 情報機器の利用

本県の携帯電話・スマホ利用によるトラブルは「LINE等に関わるトラブル（52.8%）」「ネット上の書き込み（48.4%）」が多かった。ほとんどの項目で本県は全国を下回っていたが「チェーンメール」「架空請求」で全国を上回った。また、トラブル防止のための取組では、「生徒に対する非行防止教室」「有害情報に関する保護者への啓発活動」「有害情報に関する教職員の研修」が全国を下回っており、今後の参考としたい。

7 児童虐待・クレーマー等

「心理的虐待」は、平成24年度以降毎年増加している。「身体的虐待」「ネグレクト」は、依然として10%程度報告されており、関係機関との連携強化に努める必要がある。空振りであっても「疑わしきは通告」の姿勢を引き続き忘れないようにしたい。



「東日本大震災」支援・被災地訪問

■全日本中学校長会役員が被災地訪問

平成30年7月30日（月）から8月1日（水）にかけ、全日本中学校長会役員による東日本大震災被災3県（岩手、宮城、福島）の訪問がありました。

本県には30日（月）、山本聖志会長、川越豊彦総務部長、花田英樹支援委員長、松澤宏尚事務局長の4名が来県しました。

新花巻駅から大槌町に向かう車中では、本県中学校長会役員との情報交換を行いました。

その後、佐藤進会長から映像や資料（東日本大震災の記録）をもとに、被災当時の状況について説明を行いました。

大槌町ではまず、今年の6月にオープンした大槌町文化交流センター「おしゃっち」を訪れました。施設概要の説明や展示されている震災当時の資料見学、復興に向けての映像の視聴を行いました。



「おしゃっち」での説明を聞く山本会長

次に、大槌町の4つの小学校と1つの中学校が統合して高台に移転、本県で初めて義務教育学校として設立された大槌学園を訪問しました。学校の施設・設備等を見学した後、釜石地区校長会との意見交換会を行いました。

各校から、それぞれの学校の置かれている状況や生徒及び保護者の状況等について資料を作成し、提示いただきました。釜石東中の佐々木賢治校長と大槌学園の松橋文明学園長から、

「経験した教師や生徒の減少により、震災についての風化が危惧される。」

「保護者の経済状況の厳しさ等、家庭問題が生徒の心の不安定さにつながっている。」

「年月が経過しても心のケアの必要な生徒が減少しているわけではない。」

「大人が支援されることに慣れてしまっている状況がある。」等の説明がありました。

地域に根ざした防災教育のなかでの中学生の役割や共助に対する意識、災害が発生したときの校長会としての対応等について協議しました。



意見交換会後の記念撮影

その後、来年のラグビーワールドカップの会場となる釜石鶴住居復興スタジアムに移動、見学をしながら地域の復興の様子について情報交換を行い、全日程を終えました。

助 成 金 交 付

6月4日（月）、盛岡市のホテルルイズにおいて、公益財団法人日本教育公務員弘済会岩手支部の助成金交付式が行われ、今年も県中学校長会に対し団体研究助成として助成金が交付されました。



太田代支部長から助成金を受け取る佐藤会長

日教弘岩手支部からは、教育振興事業（奨学事業、教育研究助成事業、教育文化事業）として、毎年、児童生徒への大会助成、教職員・学校・教育団体の教育実践研究への助成等をいただいています。